

タイトル

「ゴージャスお宝鑑定家〜う〜ん、ゴ
ージャス！」401

登場人物

剛田（ごうだ） 剛田質店の店主でゴージャスなお宝しか鑑定しない偏屈な性格。言動や仕草が常に優雅で品のある態度を取るが、それが過剰すぎてクセが強いと評判。座右の銘は「ゴージャスたるもの優雅たれ」。口癖は「ゴージャス！」。

白金（しろがね） 剛田質店の見習い鑑定士。剛田の付き人兼助手だが、普通の価値観を持っており、剛田のテンションに毎回振り回される。お宝を慎重に扱う性格で、剛田の大胆な行動に不安を覚える。

山田太郎（やまだ たろう） 今回の依頼人。アマゾンナイト製のシェイカーを持ち込む。父の遺品として大事にしているが、価値を知りたいと思い、剛田質店を訪れる。

ナレーション 場面転換や状況説明を担当。コミカルで軽快な語り口調。

オープニング

（静かで落ち着いた音楽が流れる中、剛田質店の外観が映る。豪華な装飾と高級感漂う雰囲気の特徴的）

ナレーション：「ここは街の片隅にある剛田質店。だが、ここをただの質店と思わなかれ。ゴージャスなお宝だけを取り扱う、その名も…剛田質店！ 今日、優雅

でハイテンションなドラマが幕を開ける！」

（店内。壁一面に豪華な装飾品や高級調度品が並ぶ。剛田が優雅にティーカップを持ちながら椅子に腰かけている。）

剛田：「う〜ん、ゴージャス！ このティーカップの曲線美、そしてこの金箔の輝き…まさに完璧だ！」

（白金がカウンターで書類整理をしている。剛田の言葉に半ば呆れたような顔。）

白金：「またですか、剛田さん。それ、店の品物ですよ。自分で使わないでくださいよ。」

剛田（カップを置き、白金に向かって優雅に手を振る）：「白金くん、君はわかっていない！ お宝というものは使ったって輝きを増すのだ！ 私の手で優雅に扱わ

れることで、さらにそのゴージャスさが
引き立つのだよ！」

白金：「（ため息）それ、ただの自己満
足じゃないですか：。」

（その時、店のドアベルが鳴り響く。）

ナレーション：「さあ、本日のお宝はど
んなものか！？ 剛田質店に新たなゴージャ
スな依頼が舞い込む！」

第一幕：依頼品登場

（山田太郎が店内に入る。片手にアマゾン
ナイト製のシェイカーを持っている。）

山田：「こんにちは！ これ、鑑定お願
いできますか？」

剛田（立ち上がり、山田を見て、手を広
げる）：「おお、いらっしやいませ！ 剛

田質店へようこそ！では早速、その品物を：見せていただこう！」

（山田がシェイカーをテーブルに置く。

剛田が細長い白い手袋をはめ、慎重にシェイカーを手に取る。）

剛田：「うーん、ゴージャス！なんと
いう輝き：これはただのシェイカーでは
ない！」

白金（シェイカーを見て首を傾げる）：

「え、普通のシェイカーにしか見えませ
んけど。」

剛田（白金に振り返り、鋭い目つきで）：

「白金くん！君の目は節穴か！？この
シェイカーはアマゾンナイト製だ！その
美しさ、硬度、そして希少性は他に類を
見ない！」

剛田（さらに熱弁）：「アマゾンナイトという石はね、希望と調和を象徴する石言葉を持つ。使う者に勇気を与え、人生を輝かせる：まさにゴージャスを極めた石なのだ！」

山田：「やっぱり目利きが違いますね！実はこのシェイカー、父の遺品でして、ぜひ適正な価値を知りたくて持ってきたんです。」

白金：「（呆れつつ）いや、それ、普通にネットで調べたらいいんじゃない？」

剛田（手を挙げて制止する）：「ノンノン！白金くん、ネットの情報など信じるに値しない。お宝というものは、魂で感じるものだ！」

第二幕：鑑定と実践

（剛田が店の奥から巨大な鑑定装置を持ち出してくる。白金が驚いた顔をする。）

白金：「な、なんですかその装置!？」

剛田：「これぞ、最新式お宝鑑定マシン『ゴージャス3000』だ!」

山田：「ええっ、そんなのあるんですか!？」

（剛田がスイッチを押すと、装置が唸りを上げて光り出す。シェイカーが装置にセットされる。）

剛田：「さあ、見よ! ゴージャスの極みを!」

（装置の画面に解析結果が表示される。）

白金：「（画面を見て驚く）うわ、本当に価値が高いですね。このシェイカー、オークションでも高値がつくかも。」

剛田（笑顔で頷く）：「フッフ：やはり私の目に狂いはなかった。これぞ、ゴージャス！」

山田：「じゃあ、いくらぐらいになりますかね？」

剛田：「このシェイカーの価値…1,000万円だ！」

白金&山田：「1,000万円！？（驚愕）」

（剛田が満足げにシェイカーを手に取り、カウンターの向こうに立つ。）

剛田：「では、その価値を証明するため、優雅にこのシェイカーでカクテルを作ろう！」

（剛田が見事な手さばきでシェイカーを振り、カクテルを作る。店内が拍手喝采に包まれる。）

剛田：「完成だ！ゴージャス・スペシャル・カクテル！」

（剛田が一口飲む。目を閉じ、深い満足感に浸る。）

剛田：「うーん、ゴージャスな味だ！」

山田と白金（カクテルを飲んで感動する）

山田「すごい！なんというか・・・ゴージャスだ！」

白金「無駄な演出でしたけど、確かに美味しい！」

満足げな剛田

第三幕：エピローグ

（夜。剛田がシェイカーを手にカクテルを作り、一人で飲んでいる。優雅な音楽が流れる中、満足げに自分に酔う。）

剛田：「フッフ：ゴージャスな私に乾杯だ。」

（翌朝、剛田が二日酔いで頭を抱えている。）

白金（呆れ顔で剛田を一喝）：「剛田さん！ いい加減にしてください！ 店の仕事に支障が出ますよ！」

剛田（頭を押さえながら弱々しく）：「すまない：だが、昨夜のカクテルは：ゴージャスだった。」

（白金がため息をつきつつ、店を開ける準備をする。）

ナレーション：「こうして今日も剛田質店はゴージャスな一日を迎えるのであった。」

（エンドクレジットに、剛田が優雅にシ
エイカーを振る映像が流れる。）